

デューラーの研究 第15

デューラーの「絵画論」
序論草稿の試訳

美術学科

下村耕史

Dürer's Drafts of Preface to his "On Painting";
a translation by Koji SHIMOMURA

本稿は Dürer: Schlichtlicher Nachlass, herausgegeben von Hans Rupprich. Zweiter Band. Berlin 1966 を底本として試みられた、デューラーが企図して未刊行のままに終わった「絵画論」の序論草稿の訳である。また、Dürers Schriftlicher Nachlass, herausgegeben von K. Lange und F. Fuhse. Halle a. S. (Reprint, Wiesbaden, 1970) を傍ら参照した。

「絵画論」草稿は、2回のイタリア滞在を通じて知ったイタリアの美術理論書、就中アルベルティの「絵画論」の影響のもとにドイツに理論に基づく美術を根づかせようとするデューラーの切なる希望から書かれたものである。今回訳出した序論草稿の部分には、従来のドイツにおける職人的美術家観を批判して、深い自然認識と人文主義的教養をそなえた新しい美術家観が提唱されている。デューラーにおける芸術論形成の過程を見るうえで重要な草稿である。

草稿の分類と作成時期はルップリに従った。訳は原文に忠実であるよりも、意味を明確ならしめるために、意識に傾いた箇所もある。注は後日、これらの草稿訳がまとまったときに、一括して付するつもりである。なお、訳中のR. は前記テキストの略であり、[]は筆者による補いである。また()は原文をカタカナで示す。

A. 緒言と目次

Nr.1 (ロンドン草稿, 1508年頃, R. 2. 91~63頁)

1.

イエズス、マリア

神の恩寵と助力によって、習練により私が学んだ絵画に役立つ全てのことが、学ぶことに熱心な全ての若者のために、ここに書かれている。素質のある者が努力すれば、事はうまくいくのであるから、私の助けを借りれば、おそらく彼らはこのような学芸(クンスト)をより高い次元で理解することになる。というのも私の能力は、正しい絵画の広汎で無限なこの偉大な理論(クンスト)を極め尽くすほどに大きくはないから。

学識豊かな(キュンストライヒ)画家とよばれあるいは実際にそうである画家とはいかなるものであるかについて、根本的に正しく理解するために、私は汝に[それを]述べて示したい。それは、このような学識豊かな画匠が1人も見られないことが、この世では2, 3百年の間あったからである。それは、そのような才能をもつ人がいても、そのことに専念しなかったことによるのである。そこでこのような学識豊かな真正の画家たるにふさわしい次の如き3つの本質的要点に注目されたい。

以下は本書全巻の3つの主要点である。

1. 本書の第1部は序論である。序論は3章からなる。

第1章は少年の教え方、その気質の特性への配慮について述べられる。6節からなる。

第2章は少年が神への畏怖と崇高の念を懐きながら教育されるべきことを述べる。それは少年が

恩寵をうけて知的学識の面で強く逞しくなるためである。6節に分かれる。

第3章は絵画の大きな有用性とその愉しさや喜びについて述べる。6節に分かれる。

2. 本書の第2部は絵画制作について論じる。3章に分かれる。

第1章は絵画の自由（フライカイト）について述べる。6節に分かれる。

第2章は人体と建物の測定および絵画に必要な事柄について述べる。6節に分かれる。

第3章は人の見ることのできる一切について論じる。模倣すべき1部分を取り出して、6節に分けて述べる。

3. 本書の第3部は結論である。3章からなる。第1章は自己の学芸（クンスト）を完成しえたときに、このような芸術家はいかなる処にいるべきかを述べる。6節に分かれる。

第2章はこのような素晴らしい芸術家は如何ほどの高額な支払いを受けるべきかを、また、彼が神的で真正であることを考えれば、如何なる値も彼にたいして多すぎることはないことを述べる。

第3章は神の賦与せる恩寵と神に寄与せる他の人々への賞賛と謝辞を述べる。6節に分かれる。

2.

1. 序論の第1章は以下の如し

第1節。如何なる[星の]徴のもとにその若者が生まれたかに注意すること。若干の説明を伴う。幸運な時をもつように神に祈れ。

第2節。若者の形姿と体格に注意すること。若干の説明を伴う。

第3節。若者は最初如何に教えられるべきか。若干の説明を伴う。

第4節。少年が最もよく学ぶことができるのは、優しくしてか、褒めてであるか、叱ってであるかに注意すること。説明を伴う。

第5節。少年に楽しんで学ばせ、いや気を起こさせないようにすること。

第6節。若者が仕事をしすぎて、そのためメランコリーに捉えられることがあれば、暫時弦楽器を演奏して血液を爽快にして、それから逃れるこ

と。

2. 序論の第2章は以下の如し。

第1節。少年が神を恐れ、神から繊細さの恩寵を求め、神を崇敬するように教育されること。

第2節。少年が飲食と睡眠に節度を保つこと。

第3節。少年が如何なる妨げも蒙らないように、快適な住いに住むこと。

第4節。少年が女性から身を護り、同居せず、見たり触れたりすることさえせず、あらゆる不純から身を護ること。不純ほど知性（フェルヌフト）を弱めるものはない。

第5節。少年は読み書きが十分にできて、若干の書物を理解するためにラテン語の教育を受けること。

第6節。少年がこのようなことを自費でなしとげることができること。また必要な時には薬を飲んで養生すること。

3. 序論の第3章は以下の如し。

第1節。それ[絵画]は神的で、宗教的な優れた訓戒に利用されるので、有益な学芸（クンスト）である。

第2節。それは有益である。人が諸学芸（キュンステン）に打ち込めば、多くの悪はそれによって避けられる。そうでなく人が無為に過ごせば、それらは生じる。

第3節。人が何も考えなくともそれに没頭さえすれば、それはそれ自体で非常に多くの喜びとなるので、それは有益である。大きな喜びをそれらもつ。

第4節。それは有益である。それが正しく使用されれば、それから大きな永遠の記憶が得られる。

第5節。神がこのような学識（クンスト）を具備せる被造物にこれほどの知性（フェルヌフト）を賦与するのを人がみれば、神はそのことで崇敬されるので、それは有益である。また賢人達は全て学識の故に汝に好意をもつ。

第6節。それは、もし汝が貧乏になったときには、このような学芸によって大きな財産を得ることができるので、有益である。

Nr. 2 (ロンドン草稿, 1508年頃, R. 2. 94~95頁) [Nr. 1 の 1 の第2部第2章の目次]

1.

人〔体〕の尺度について。

馬の尺度について。

建物の尺度について。

透視図法について。

光と影について。

色彩について。それは如何にすれば自然(ナトゥア)に似せられるか。

2.

本書は10種の内容を含む。

1. 幼児の尺度

2. 成人の尺度

3. 女性の尺度。

4. 馬の尺度

5. 建物について若干。

6. 見られるものの〔平面への〕投影について。

全てのものは〔画面に〕投影されること。

7. 光と影について。

8. 色彩について。自然に似せて彩色すること。

9. 絵画の秩序〔構図〕について。

10. 一切の助けなしに理性(フェルヌンフト)からのみ作られる自由画について。

B. 序論

Nr. 1 絵画と美について。(本研究報告第15巻, 1984年, に拙訳を既に掲載しているので, 省略する。)

Nr. 2 古代のカノンの喪失, 神々の尺度のキリストへの応用, 新しい美術理論書を作る必要(ロンドン草稿, 1512/13年, R. 2. 103~104頁)

アペレース, プロトグネス等々の古代の画家と彫刻家は, よき形をした人間の肢体は如何にすれば作られるか, ということについての理論書を書いたと, プリニウスは伝えている。このような高貴な本が偶像崇拜を憎むあまり, 教会の初期に抑圧され抹消されたことは十分にありうる。というのも, それらは次のようにのべているからである。

即ち, ユピエルはかくの如き比例(プロポルツ)を, アポロ(アポロ)は他の比例を有つべきであり, ヴェヌス(フェヌス)はかくあるべきであり, ヘラクレス(エルクレス)はこうあるべきであると。その他〔の神々〕についても同様に述べられる。私が偶々その時代に生まれていたら, 私は次のように言ったであろう。『おー! 敬愛せる聖人と教皇様に[お願いいたします]。多大の労苦と勤勉により集積され発見された高貴な理論(クンスト)をその悪用の故にかくも嘆かわしく破壊し給う勿れ。なぜならば理論は偉大で, 重要で, 善きものでありますから。そして我々はそれを大きな崇敬の念をこめて神の称賛に使用したいと存じます』。

そして彼らが人間の最美の形態を彼らの偶像神アポロにあてはめたように, 我々も同じ尺度を世界中の最美の主キリストに使用したい。また彼らがフェヌスを最美の女性として表したように, 我々はその同じ優美な形態を神の母なる最も清らかな聖処女マリアにおいて優雅に示したい。また我々はエルクレスからサムソン(ソムソン)を作りたい。他の全てのものについても, 我々は同様になしたく思う。

だがこのような本を我々はもはや有たない。それで失われたものはとり返しが見つからないので, 人はなお他のものを求めなければならない。このような事情が次に述べる私の意見を提示する企画へと私を動かしたのである。それは, 幾人かの人がそれを読んで, それについて更に考え続け, 人が日々より精密でより優秀な方法と根拠に近づくことができるためである。そして尺度と数と重さ〔に関する記述〕から私の企画を始めたい。それに注意を払う者は〔それらについての知識を〕見いだすであろう。

Nr. 3 人像の測定。画家, 彫刻家, 鋳金師のための意義と有用性。(ロンドン草稿, 1509—1512年, R. 2. 105頁)

それで私はそれについて更に考えて, 人像たるものは最高度に精確に測定されるべきものだと

思った。それら多数の中から幾つかの美しいものが集められて、立派に1つに結合されうる。尺度を正しく用いれば、各々のものは理論的に（キュンストリッヒ）正しく作られる。

このような尺度を企画のなかにとり入れて、如何にすれば人像が外的形態から測定されうるかを示したい。画家、彫刻家あるいは鑄金家は、木、石その他の堅いものから彼らが[何を]作ろうとも、それ[尺度]を利用することができる。彼らは手ほどきをうけるためにも教化のためにも[尺度を学んだ方がよい]。

全ての長さや高さを線で示すことにする…。

Nr. 4 知識の善たること（ロンドム草稿，1511/13年，R. 2. 106～107頁）

1.

何かあることを識る（クネン）ことは善いことである。なんとなれば、それによって我々は、一切を為し給う神の御姿にそれだけ似た者となるから。それで暇な時に何かを学び、神を崇敬しその役に立とうと心がける人は、善を為すのである。

何かあることを識る（キュネン）ことは、非常に善いことである。なんとなれば、それによって我々は一切を為し給う神の御姿にそれだけ似た者となるから。我々は多くのことを識りたがる。全ての事柄の正しい真理を認識するために、多くのことを識りたがるという傾向が、生来我々に植えこまれているからである。だが、我々の脆弱な精神（ゲミュート）は、全ての学識（キュンステン）、真理（ヴァールハイト）および知恵（ヴァイスハイト）のこの[神の]ような完全性に至ることはできない。だが全ての知識（ヴァイセンハイト）から我々が全く締め出されているわけではない。学習によって知性（フェルヌフト）を研ぎすましてそれに励むならば、我々は真正な方法によって幾つかの真理を求め、学び、認識し、獲得してそれに達することが十分にできるのである。

それで暇な時に自己に最もふさわしいと感じられるものを学び、神を崇敬して自己自身や他人の役に立てようと心がけている人は、善を為すので

ある。彼らのなかの多くの人が様々な学識（キュンスト）を探り出して、今日我々に役立つ真理を示したことは、知られている。それで自己の学んだことを他人に教え示す人も、善を為すのである。彼は我々に我々のもつ全ての知識（キュネン）を伝え給う神の意思を用いているからである。学識（クンスト）は人を不遜にするという理由で、幾人かの無教養な人たちがそれに反対するとしても、人が多くのことを学ぶことは悪いことではない。もしそうだとすれば、全ての知識（クンスト）を具え給う神ほど高慢な者はいないことになろう。それは有り得ないことである。神は最高善であるから。それ故多くのことを学ぶ人は、それだけ善となり、諸々の知識（キュンステン）への愛をそれだけ有つことになる。それで人が怠らずにふさわしい時に何かあることを学ぶことはまことに正当なことである。無知な上に、何も学ぼうと欲せず諸々の学識（キュンスト）を軽蔑して、幾つかの知識（クンスト）は全く悪いなどと言う者が何人かいるが、私としては全ての知識（キュンスト）は善であるが悪用されうるだけであると言いたい。学識ある（キュンストリッヒ）人は、元来敬虔であって、悪を避け善を為すものなのである。諸々の知識（キュンスト）はそのことに役立つ。それらが善悪を認識させるからである。幾人かの人たちだけはあらゆる種類の（クンステン）を学ぶことができるが、それは誰にでも許されているわけではない。かといって完全に無知蒙昧な人間はいない。人は何かを学ぶことができるのであって、愛こそ彼をそれへと誘うのである。このような理由から、何も学ばなくてもよいという言い訳は誰にも成り立たない。それで誰かが教示したり模範として示すときに、共同の利益に必要なことを、人はそこから学ぶことができるし、またより良いことを[学ぶことを]避けるように強制もされない。見聞し理解することは、善いことである。我々が一切を学びそれを後世に正確に伝えることが、必要であることを、私はいままさに認識する。

2

… 幾人かの無教養な人が学識を憎んで、それら

は高慢を生むとあえて言うとしても、そういうことは有り得ない。学識は心から謙遜たらんとする事の機因となるものだからである。だが無知で何も学ぼうとせずに諸々の学識を軽蔑する人たちは、それから多くの悪が生じたり、また〔学識を有する〕幾人かの人たちは全く悪人であるとしきりに言うものである。だがそういうことは有り得ない。神は全ての知識を具えているので、それらはみな聖寵にみたされ、徳に溢れ、善でなければならぬからである。それで私は一切の知識を善とみなす。鋭利な出来栄えのよい剣は、裁きにも殺害にも使用されないだろうか。だからといってその剣がより善であるとかより悪であるとかいえるであろうか。諸々の学識についても同様である。優れた敬虔な人物は多くの学識〔を得ること〕によって一層優れたものになろう。それらが善悪を識別させるからである。それで人が自分に何が最も適しているかに注意して、それを学ぼうと心がけることを私は善とみなすのである。

Nr. 5 人の知識欲、学習の必要、視覚の優越、絵画の知識の擁護、古代人におけるその高い評価、古代の美術理論書の喪失（1と3はロンドン草稿、2はニュルンベルク草稿、1512年、R. 2. 108～114頁）

1

何かあることを述べる事が有害とならず、またより良きことを妨げないときには、人はその言に耳を傾けることができる。それで志ある人は、私の為せることを見聞しなさい。現世の事物への欲望は全て過剰によって満足せられ飽きられるのであるが、多くのことを識ることだけは例外であり、そのことで飽きるといえることはない。一切の正しい真理を認識するために多くのことを識りたがる傾向が、本来我々に植えつけられているからである。だが我々の脆弱な精神（ゲミュート）は、あらゆる真理、学識および知恵のこのような完全性に達することはできない。だからといって我々が全ての真理から全く締めだされているわけではない。学習によって理性を研ぎすましてそれに励

むならば、幾つかの真理を正しい方法で探求し、習得し、認識してそれに達することが我々にも十分にできるのである。[そのように努めた人々の] 多くの人たちが様々な学識を探り出して、我々に役立つ真理を示したことは知られている。それで人が怠らずに自己に最適と思われるものを然るべき時に学ぶことは全く賞賛すべきことなのである。幾人かの人にはあらゆる種類の知識を学ぶことができるが、それは誰にでも許されているわけではない。だが全く無知蒙昧な人間はいない。人は何かを学ぶことができるのであって、精神こそ彼をそれへと誘うのである。それ故、何も学ばなくてもよいという言い訳は誰にも成り立たない。我々が学びそれを後世に正確に伝えて秘さないでおくことが、共通の利益のために必要である。それで私は、わずかな人でもよいから見てみたいと思うような事について書くことを、企画したのである。なぜならば人間の最高の高貴な感覚は、視ることであるから。それで見られる物は、聞かれる物よりも、信じられ、また抗い難い〔力をもつ〕。見聞あわさればもっと強力となる。我々の視覚は鏡に似る。それが眼前の殆どあらゆる形態を捉えるからである。だが我々の眼の本性として、ある形態や形姿（ピルトヌス）が他のそれよりもはるかに快くまた好ましく、映るものである。それで人はしばしば一方の方を好んで見たがるものであり、またそれが美しければそれだけ、それは人の喜びとなる。美しい形態についてのこのような判断は、他の誰よりも、学識に富む（クンストライヒ）画家の知性（フェルシュタント）のなかにこそある。なぜならば彼らは、一切の可視的なもの〔の美的価値〕を判断するのに、他の人たちよりも多くの知性を有するからである。正しい尺度（マース）は良き形態を与える。それは絵画だけでなく、数え挙げられうる全ての立体的なものについてそうである。絵画に役立つことを私が記述することも、非難できない。なぜならば絵画によってキリストの受難は示されるのであり、[かくてそれは]教会に奉仕することになるから。絵画はまた人の姿をその死後にも保つ。

絵画の理論(クンスト)は優れた画家自身によって最もよく理解される。そうでない人には、ちょうど汝が外国人に語りかけられるように、わからないままである。絵画の偉大な理論は、何百年も前には強大な王たちのもとで大いに尊重されていた。彼らは優れた芸術家(キュンストナー)を金持にして、[彼らを]尊厳な存在とみなした。彼らには聖書に書かれているように、高い知性の持ち主は神と類似するものを有つように、見えたからである。優れた画家の心は、形像(フィグール)で充ちている。もし永遠に生きることができれば、彼はプラトン記すところの内的アイデア(イデー)から[汲んで]、新しいものを作品によってつねに注ぎ出すことであろう。何百年も前にはフィディアス、プラクシテレス、アペレース、ポリクレートゥス、パルハシアス、リシップス、プロトギネスという名の幾人かの優れた巨匠たちやその他の優れた師匠たちが生きていた。そのなかの何人かは、彼らの知識(クンスト)を著して[それを]理論的に(キュンストリッヒ)示し、公表した。しかるに、彼らの賞賛すべき記念碑と理論(クンスト)は、戦争や民族の追放や法律と信仰の変化のために、失われてしまった。幾人かの賢者はそれを歎いている。高貴な才能の持ち主たちが無教養な知識の弾圧者たちによって抹殺されることがしばしばあった。幾本かの線で引かれた図形を見て、それを無意味な悪魔祓いと思ったのである。このように彼らは神に背きながら神を崇めているのである。多大な苦勞と勤勉と時間をかけて創出され、神によってのみ賦与されるこのような熟達(マイスターシャフト)を根絶させる人たちは神は、人の言い方を借りれば、不快に思われるのである。嗚呼!何と歎かわしいことであろうか...

2

何かあることを語ることが、無害でありまたは良きことを妨げないならば、志のある人はその言に耳を傾けることができる。それで必要な時には、視覚について私の提案することに、耳を傾けなさい。現世の事物への欲望は、全て過剰により満足せられ飽きられるのであるが、多くのことを識

ことだけは例外であり、そのことで飽きるということはないことを、私は知っている。一切の正しい真理を認識するために多くのことを識りたがる傾向が、生来我々に植えつけられているからである。

だが我々の脆弱な精神(ゲミュート)はこのような完全性に達することはできない。智恵と学識は我々の得がたいものであるから。かといって全ての智恵から我々が締め出されているわけではない。学習によって理性を研ぎすましてそれに励むならば、幾つかの真理を正しい方法で探究し、習得し、認識してそれに達することが我々にも十分にできるのである。[そのように努めた]多くの人たちが、様々な学識を探り出して我々に役立つ真理を示したことは、知られている。それで人が怠らずに自己に最適と思われるものを然るべき時に学ぶことは、全く賞賛すべきことなのである。幾人かの人にはあらゆる種類の知識(キュンステン)を学ぶことができるが、それは誰にでも許されているわけではない。だが全くの無知蒙昧な人間はいない。人は何かを学ぶことができるのであって、精神こそ彼をそれへと誘うのである。仮令全くといってよいほど知性(フェルヌフト)を有たない人でも[そうなのである]。

それ故、何も学ばなくてもよいという言い訳は誰にも成り立たない。暇な時に我々が全てを学び、それを共通の利益のために後世に正確に伝えることが、必要である。それで私は多くの若者が熱心に見たがるような、とりわけ絵画に役立つように記述し[たものを]作ることを企画した。なぜなら人間の最高の高貴な感覚は、視ることであるから。それで見られる物は、聞かれるものよりも、信じられ、また抗い難い[力を持つ]。見聞あわされば、もっと強力となる。我々の視覚はある意味で鏡に似る。それが眼前の殆どあらゆる形態を捉えるからである。だが我々の眼の本性として、ある形態や形姿が他のそれよりもはるかに快くまた好ましく、映るのである。それで人はしばしば一方の方を美しさの故に好んで見たがるものであり、またそれが美しければそれだけ、それは人の喜び

となる。美しい形態についてこのような判断は、生れついで好みの有つ人々よりも、学識に富む（キュンストライヒ）画家の方が信頼される。なぜならば学識に富む人は、ある形態の他のそれよりも美しい理由を、示すことができる。正しい尺度は良き形態を与える。それは絵画だけでなく、数え挙げられ得る全ての立体的なものについてそうである。

絵画に役立つことを記述することは、非難されない。なぜならば絵画によってキリストの受難は示されるのであり、[かくてそれは]教会に奉仕することになるから。絵画はまた人の姿をその死後にも保つ。

絵画の理論(クンスト)は優れた画家自身によって最もよく理解される。そうでない人には、ちょうど汝が外国人に語りかけられるように、わからないままである。絵画の偉大な理論は何百年も前には強大な王たちのもとで大いに尊重されていた。彼らは優れた芸術家(キュンストナー)を金持ちにして、[彼らを]尊厳な存在とみなした。彼らはこのような意義内容を神に類似するものと評価したからである。優れた画家の心は、形像で充ちている。もし永遠に生きることができれば、彼は...

3

Salus 1512

何かあることを語ることが、害よりも利益となりまたより良きことを妨げないならば、人はその言に耳を傾けることができる。それで志ある人は、私の為せることを見聞しなさい。現世の事物への欲望は、全て過剰により満足せられ飽きられるのであるが、多くのことを識ることだけは例外であり、そのことで飽きるということはない。一切の正しい真理を認識するために多くのことを識りたがる傾向が、生来我々に植えつけられている。だが我々の脆弱な精神はあらゆる学識、真理および知恵のこのような完全性に達することはできない。だからといって我々が全ての知恵から締め出されているわけではない。学習によって理性を研ぎすましてそれに励むならば、幾つかの真理を正しい

方法で探究し、習得し、認識して、それに達することが我々にも十分にできるのである。[そのように努めた人々の]多くの人たちが、様々な学識を探り出して我々に役立つ真理を示したことは、知られている。それで人が怠らずに自己に最適と思われるものを、然るべきときに学ぶことは、全く理に適うことなのである。幾人かの人はあらゆる種類の知識を学ぶことができるが、それは誰にでも許されているわけではない。だが全くの無知蒙昧な人間はいない。人は何かを学ぶことができるのであって、精神こそかれをそれへと誘うのである。それ故、何も学ばなくてもよいという言い訳は誰にも成り立たない。我々が学びそれを後世に正確に伝えて秘さないでおくことが、共通の利益のために必要である。それで私は若者が熱心に見たがるようなことを記述することを、企画した。なぜなら人間の最高の高貴な感覚は、視覚であるから。それで見られる物は、聞かれるよりも、信じられ、また抗い難い[力をもつ]。見聞あわされば、もっと強力に把握される。それで、一層よく把握され注意されるように、私は述べるとともに図で示すことにしよう。我々の視覚はその意味で鏡に似る。我々に呈示されるあらゆる形態が、我々の目に映るからである。このように我々の見るあらゆる形態は眼を通して精神に及ぶのである。我々の眼の本性として、ある形態や形姿が他のそれよりもはるかに好ましく見えるものである。それでいて一方がより善いとかより悪いとかということはない。我々は美しいものを好んで見たがるが、それはそのことが我々に喜びを与えるからである。美を判断するには、他の人よりも理論に富む(キュンストライヒ)画家の言葉の方が信頼される。

正しい尺度は良き形態を与える。それは絵画だけでなく、数え挙げられうる全ての立体的なものについてもそうである。絵画に役立つことを私が記述することは、当を得ないことでもない。なぜなら絵画によってキリストの受難は示されるのであり、[かくてそれは]教会に奉仕することになるから。またそれは人の姿をその死後にも保つから

である。大地、水面および星辰の測定は、絵画によるのが理解し易く、絵画の呈示するものによって、人は多くのことを識るであろう。絵画の真正な理論（クンスト）を習得することは、困難である。それで自分がそれにふさわしくないと考える者は、それを志すものではない。なぜなら[才能の]流入はより高きところよりくるのであるから。

絵画の理論は優れた画家自身によって最も理解される。実際、そうでない人には、ちょうど汝が外国人に語りかけられるように、解らないままである。この理論に励むことは、暇のある明敏な若者にふさわしい高貴なことなのである。

絵画の偉大な理論は、何百年も前には強大な王たちのもとで大いに尊重されていた。彼らは優れた芸術家を金持ちにして[彼らを]尊厳な存在とみなした。彼らはこのような意義内容を神に類似するものと、評価したからである。優れた画家の心は、形像で充ちている。もし永遠に生きることができれば、彼はプラトン記すところの内的イデアから[汲んで]新しいものを作品によってつねに注ぎ出すことであろう。

何百年も前には、フィディアス、プラクシデレス、アペレース、ポルテクルス、パルハシアス、リシップス、プロトギネス等々という名の幾人かの高名な画家がいた。そのなかの何人かは彼らの知識を著して、[それを]理論的に示して公表した。しかるに彼らの賞賛すべき書物は、従来隠れたままであり、もしかすると戦争や民族の追放や法律と信仰の変化のために全く失われてしまったのかもしれない。賢者がそれを歎くのは無理はない。高貴な才能の持ち主たちが、無教養な知識の弾圧者たちによって抹殺されることがしばしばあった。幾本かの線で引かれた図形をみて、それを無意味な悪魔祓いと思ったのである。彼らは神に背きながら神を崇めているのである。多大の苦勞と勤勉と時間をかけて創出され、神によってのみ賦与される偉大な熟達を根絶させる全ての人たちを神は、人の言い方を借りれば、不快に思われるのである。前出の大家たちの理論書を断念せざるを得ないことは、返す返すも悲しいことである。

しかし知識を憎む者は、これらのもの[美術理論書]を惜しまないのである。

[美術理論書について]何か新しいことを誰かが書いて、私のよりよき向上のために参看しうるものを公にしたということを、私は聞かない。[美術理論の習得者が]幾人かいるのであるが、その人たちは彼らの理論を秘すのである。そこでこのようなことを知らない幾人かの人たちが、それらについて書くことになる。それらの本の内容は、殊の外空々しく思われる。というのもその言葉は美辞麗句にすぎないから。少しでも識る者はそのことにすぐと気付く、それで彼らのなかの多くの者が、私の為すことを軽蔑するにしても、私としては神の助けをかりて自分の学べる僅かなことを示したい。彼らの軽蔑は問題ではない。というのも何にしてもより良きことを為すことよりも、それを非難することの方が易しいことを、私は知っているからである。私はできるだけ分かりやすくしかも包み隠さず、私の意見を開陳したい。そしてできれば、金銀よりもこのような知識を受する素質のある若者たちのために、私の識る一切のことを公にしたい。また知識を有する全ての人が、それらについて記述することを勧める。神への崇敬と汝らへの賞賛が高まるように、探究し識ることを好む人たちのために、汝らの知識を精確かつ明確に、理解し易くまた回りくどくなく、記されたく思う。

Nr. 6 美について。作品について素人の判断を求めること。(ロンドン草稿, 1512年, R. 2. 115頁)

何人も自信過剰になってはいけない。多人数の方が1人のときよりも多くのことに気付くから。たとえ1人の方が他の百人よりも良く理解することがありえても、それは稀である。有用は美の大部分である。それで人[体]における無用は美にあらず。過剰にならぬように注意しなさい。あるものが他のものに対して均衡(フェアグラインク)のとれていることが美である。それで跛行は美ではない。また等しくないもののなかにも均衡はある。絵画に関する事柄や理論(キュンステン)

についてはなお多くのことが人々によって書かれるであろう。この理論（クンスト）について十分に、また私よりもより良く書いたり教えたりする多くの優秀な人たちが現れることを期待する。自分の理論はとるにたりないものと思っている。自己の不十分さも知っている。それで各人はそれぞれの能力に応じて、このような私の不備を改善するように心がけるがよい。できることなら、まだ生まれてこない未来の巨匠たちの作品と理論（キュンツ）をいま見たいものである。私の理論をそれによって改善しようと思うからである。また目覚めているときには見られないような、偉大な理論と優品を夢のなかで如何にしばしばみることであろうか。だが目覚めれば、その記憶は失われるのだ。学ぶことを誰も恥じてはいけぬ。よき助言は優れた作品〔を作るの〕に役立つから。だが助言をうけるときには、理論によく通じてそれを手〔作品〕で示す人からうけなさい。だが次のことは誰にでもできるし、またよいことでもある。即ち、好みのままに作品を作って、それを理論を解しない無教養な人たちの前において、それについて判断させることである。なぜなら彼らはそれをよく理解できないにしても、最も拙い部分はふつう見てとるから。彼らが真実を述べていると思えば、作品を改善することができる。これらのことについてはもっといろいろと書かれるが省略して、男女の外形を作る仕事に入りたい。

Nr. 7 人体均衡論を最初に完成させる意図。美しい人像と選択の理論。美について。作品について素人の判断を求めること。（ロンドン草稿，1512年，R. 2. 117～121頁）

1

私が点火して〔そのために〕理論の増大と改善がなされるならば、やがて全世界を照らす火がそこからしだいに掻き立てられる。美しい人間を見ることは我々に好ましい。それで私は人〔体〕の尺度を作ることから始めたい。その後神が時間を与え給うならば、他のことについてもっと多くのことを書いたり為したりしたい。

だが嫉妬深い人たちが憎しみを胸のうちにとどめておかないことを、私はよく知っている。だがそれに妨げられてはならない。偉人はこのようなことに耐えなければならない。

人には様々な形態があり、4つの体質の原因がある。我々の裁量に任された画面を作るとき、その主題にふさわしいように、できるだけ美しく作るべきである。多数の異なる良き人像を作るとは僅少な理論によってはできない。奇形（ウンゲシュタルト）は作品にいつも自ずとおりこまれるものである。

美しい人像を作ろうと思えば、ある人から頭部、他の人から胸、腕、脚を、また体部の全ての四肢の前後面についても、もれなく性質（アールト）と部分（グリートマース）を多くの人〔体〕に探し求めることが必要である。そして〔その際〕事物（ディンク）〔部分〕を正しく平均化（ミッテル）しなさい。過多と過少の間に正しい平均（ミッテル）がつかねにある。どの作品においてもこれを忘れてはいけぬ。いま述べられたことに注意しない者は、良き作品を作ることはない。

私は自分が呈示しようと思う尺度を最良のものとして賞賛しはしない。また非難もしないし、最も拙劣な意見だともいわない。また私の意見がまさにそうでなければならぬものだと主張しない。だがそれによってより良きものを求めることができるし、より高い知性（フェルシュタント）と優れた思索に応じてより良きものを創案することもできる。このような〔尺度に関する〕事柄ではつかねにどちらが良いかという考えがつかまとうものである。けれども〔私の意見より〕良い意見を実際に教示されるまで、私の意見を良しとしなさい。

2

私が点火して〔そのために〕理論の増大と改善がなされるならば、やがて全世界を照らす火がそこから次第に掻き立てられる。美しい人間をみることは我々に好ましい。それで私は人〔体〕の尺度を作ることから始めたい。その後神が時間を与え給うならば、他のことについてもっと多くのこ

とを書いたり為したりしたい。だが嫉妬深い人たちが憎しみを胸のうちにとどめておかないことを、私はよく知っている。だがそれに妨げられてはならない。偉人はこのようなことに耐えなければならない。

各人はより良き意見を教示されるまで、私の意見を良しとして受け入れなさい。正確になしとげる優れた人が、後世現れるであろうから。できることなら、まだ生まれてこない彼らの作品をいま見たいものである。

人には様々な形態があり、4つの体質の原因がある。我々の裁量に任された画面を作るとき、その主題にふさわしいように、できるだけ美しく作るべきである。[その際]奇形(ウンゲシュタルト)は作品にいつも自ずとおこまれがちである。

美しい人像を作るためには、多数の人間からそれを探し出して、それから形像を集めることが必要である。1人からそれを取り出すことはできない。全ての美を1身に具えた人間はこの世にいない。もっとはるかに美しい人間がいつも考えられるから。また、人間の最美の形態はかくあらねばならぬと究極的に断言できる人物は、この世にいない。神のみぞこれを知り給う。

我々の企画はこのような事柄について助言を与えることである。我々はある種の物がある場合は美しいとみるが、他の場合にはそれは美しくないかもしれない。ある人はより優れた知性(フェルシュタント)を有つが故に、他の人よりも真理により近づく。その人が写生すべき美しい人々を眼前に有つとする。[すると]全く異なる2つの像が作られて、両者全く似ずに、一方は肥え、他方は痩せた形態をしているのであるが、そのどちらがより美しいかを誰も判断できないということも十分にありうる。

物の性質に合わせて、美は各作品にとり入れられなければならない。多くの物に美はつきものであるけれども、美とは何であるかを私は知らない。美を作品にとり入れようとしても、それは多大の困難を伴う。それは全肢体にわたってひろく集められなければならない。たとえ、二、三百人が精

査されても、それから何1つ取るべきものはみつからないかもしれない。

私は自分の呈示する尺度を高く賞賛しようとは思わないが、最悪の意見だとも言わない。このような[尺度に関する]事柄ではつねにどちらが良いかという考えがつきまとうものである。だが私の提案する方法によって、[私の意見よりも]より良い意見が創案され得る。人々の多くは自己の気に入るものだけを賞めたがる。それは誤りである。

有用は美の1部分である。それ故人間に不用のものは美ではない。過剰にならぬよう注意しなければならない。あるものの他のものに対する均衡(フェアグライフンク)は美しい。それ故に跛行は美しくない。美について語るのに、私はある種の事柄がまさに決められているのと同じやり方で、論じたい。つまり、世界中[の人々]から真正と認められるものが、真正とみられるものである。それと同様に、世界中[の人々]が美しいと評価するものを、我々も美しいとみなして、それを作るように努力したい。

私の意見はまさにそうでなければならぬというのではなく、優れた思考とより良き知性(フェルシュタント)によってもっと優れた意見をそれから引き出すことができる。

だが自己愛が盲目的判断を下さないように、各自注意することである。母親にはそれぞれ自分の子供が気に入るものである。それ故多くの画家は自分に似るように作ることになる。美には様々な相異がある。また美には様々な原因がある。それを[作品で]実証し得る人は、それだけ信頼をうることになる。

欠陥が排除されればされるだけ、それだけ多く美は残る。何人も自信過剰に陥ってはならない。多人数の方が、1人よりも多くのことに気付くものである。1人の方が他の千人あわせたよりも聡明であることがたとえありうるとしても、それは稀にしかない。

3

私が点火して[そのために]理論の増大と改善がなされるならば、やがて全世界を照らす火がそ

こから次第に掻き起こされる。

美しい人像をみることは他のなによりも我々に好ましい。それで私は人〔体〕の尺度を作ることから始めたい。その後神が時間を与え給うならば、他のことについてもっと多くのことを書いたり為したりしたい。だが嫉妬深い人たちが憎しみを胸のうちにとどめておかないことを私はよく知っている。だがそれに妨げられてはならない。偉人はこのようなことに耐えなければならない。人には様々な形態があり、4つの体質の原因がある。我々の裁量に任された画面を作るとき、その主題にふさわしいように、できるだけ美しく作るべきである。多数の異なる良き人像を作るとは僅少な理論によってはできない。奇形(ウンゲシュタルト)は作品にいつも自ずとおこまれるものである。作べき美しい形像を1身に具えた人間は、この世にいない。もっとはるかに美しい人間がいつも考えられる。また、人間の最美の形態はどのようなものであるのかを究極的に断言できる人物はいない。神のみぞこれを知り給う。[しかし]美を判断することについては論究され得る。素質(ゲシツクリカイト)に応じて人は美を各作品にもち込まなければならない。我々はあるものを幾つかのものなかでは美とみるが、他のものなかでは美とみないであろう。美しいとより美しいと〔の区別〕は、我々に容易に認識し難い。異なる2つの像が作られて、両者全く似ずに、一方は肥え、他方は痩せた形態をしているのであるが、そのどちらがより美しいかを、我々はよく判断できないということも十分にありうる。多くの物に美はつきものであるけれども、美とは何であるかを私は知らない。美を作品にとり入れようとしても、それは多大の困難を伴う。それは広く集めなければならない。特に人体では肢体全体の前面と背面の全てにわたってそうしなければならない。たとえ二、三百人が精査されても、それらから使用に耐える1、2の部分が見つかるかどうかの程度なのである。

良き像を作ろうと思えば、ある人から頭部を、他の人から胸、腕、脚、手、足を写しとり、また肢体全体にわたってあらゆる性質を探し求めるこ

とが必要である。蜜が多くの花から集められるように、良きものは多くの美しいものから集められる。過多と過少の間に正しい平均(ミッテル)がある。汝の全ての作品でそれを実現するように努めなさい。あるものを「美」とよぶことを、ある種の事柄がまさに決められているのと同じやり方で、論じたい。つまり、世界中の〔の人々〕が真正と評価するものを、我々は真正とみなす。それと同様に世界中〔の人々〕が美とみなすものを、我々も美とみなしたいし、またそれを作るように努めたい。

私は自分の記述する尺度を最悪の意見とは思わないけれども、高く賞賛しようとも思わない。それで私の意見がまさにかくあらねばならぬしまたそれと異なってはならないというように、私は定めない。だがその意見によってより良い方法が探究されるし創案される。各人は自己の作品で改善をもっと考えるべきである。だがより良き意見を実際に教示されるまで、私の意見を良しとして受けいれなさい。ある人はより高い知性を有つので、他の人より真理に近づく。その人が写生すべき美しい人々を眼前に有つとする。[するとそういう人たちでも] その多くは自分の好みだけに頼ることになり、その結果は誤りとなる。それで自己愛が盲目的判断を下さないように、各人注意することである。母親にはそれぞれ自分の子供が気に入るものである。それ故多くの画家は自分に似るようになることになる。美には様々な相異と原因がある。それを〔作品で〕実証し得る人は、それだけ信頼をうることになる。欠陥が排除されればされるだけ、それだけ多くの美は残る。自信過剰に何人も陥ってはならない。多人数の方が1人よりも多くのことに気付くものである。1人の方が他の千人あわせたよりも理解力があるということがたとえありうるとしても、それは稀にしかない。有用は美(シャーンハイト)の1部分である。それ故人間に不用のものは美ではない。過剰にならぬように注意しなければならない。あるものの他のものに対する均衡は美しい。それ故に跛行は美しくない。また等しくないものなかにも均衡はあ

る。これらの事について人々はもっと多くのことを書くであろう。この理論について十分に、また秀才なる私よりもより良く書いたり教えたりする多くの優秀な人たちが、現れることを期待する。できることなら、まだ生まれてこない人たちの優れた作品を私自身の改善のため、いま見たいものである。

作品をよくするためには良き助言が役立つ。それで理論面での助言をうけようと思えば、このような事に精通してそれを手〔作品〕で示す人からうけなさい。だが次のようにすることは誰にでも出来るし、またよいことである。即ち、作品を好みのままに作って、それを理論の分からない無教養な人たちの前において、彼らの判断に任せなさい。すると彼らは優れた面は理解しないにしても、最も拙劣な面はふつうみてとるものである。彼らが真理を語っていると思えば、汝の作品を修正することができる。

このようなことはもっと多く記述されよう。だが私は省略して、男女の外形を作る仕事にすすみたい。

以下のような人体測定の手引きと記述については私の拙い意見を意味の通る範囲内で最も簡潔に示すことを旨とする。私は全ての部分を、必要な限り数字で、あるものは文字でよぶ。作品に利用するのに容易ならしめるためである。

(上記に続く文は、今回は省く。人体比例に関するデューラーの遺文については後にまとめて訳出するつもりである。)

Nr.9 学習の必要。生得的学習欲。認識の限界。教養を敵視する意見への弁明。ドイツの画家の教育の必要。視覚の高貴さ、美の判断。「尺度」の機能と絵画の課題（ロンドン草稿，1513年，R. 2. 129～133頁）

1

Salus 1513

絵画指南

如何なる人も利益を得ようと思えば、多くのことを学ぼうと心がけなさい。知識によって我々は

神の御姿にそれだけ似たものになる。学習の苦しさへの不平を言うてはならない。それは未来の喜びをもたらすから。

良き人間は多くのことを好んで為したが、一切の真理を生来識りたがるものである。だが我々の脆弱な精神（ゲミュート）は真の完全性に達し得ない。かといって我々は一切の知識と知恵から全く締め出されているわけではない。学習によって理性を研ぎすましてそれに励むならば、我々は正しい方法と手段によって幾つかの真理を探索して幾分かでも学び、認識し、獲得してそれに達することができる。暇な時間を失わぬように…

2

Salus 1513

以下の教えは絵画を志す若者の教育のためになされる。

何かあることを識ることは善いことである。なんとなればそれによって我々は一切を識り給う神の御姿にそれだけ似たものになるからである。それ故に我々は全てのことを学ぶべきであり、知識を何人も有つべきである。様々な知識がみられる。それらの1つを学ぶように心がけて、それを我が物とし、それを楽しむようになるまで、苦勞の不滿をこぼさないようにしなさい。我々には熱心に識りたがる傾向があり、それに飽きるということを知らない。一切の正しい真理を認識するために全てのことを識りたがる傾向が、生来我々に植え込まれている。だが我々の脆弱な精神は一切の知識、真理および知恵のこのような完全性に達することはできない。かといって我々は全ての知識から全く締め出されているわけではない。学習によって理性を研ぎすましてそれに励むならば、我々は正しい方法と手段によって幾つかの真理を探索し、学び、認識し、獲得してそれに達することが十分に出来るのである。

それで暇なときに自己に最もふさわしいと感じられるものを学び、神を崇敬して自己自身や他人の役に立てようと心がける人は善を為すのである。彼らのなかの多くの人が様々な知識を探り出して、今日我々に役立つ真理を示したことは知られてい

る。

それで人が他人に教えることは正しいことである。我々の有つ一切のものを我々に与え給う神は、それ故我々におしえられたのだ。学識は人を不遜にするという理由で幾人かの無教養な人たちがそれに反対するとしても、人が多くのことを学ぶことは悪いことではない。もしそうだとすれば、全ての知識を具え給う神ほど高慢なものはないことになろう。それはあり得ないことである。神は最高善であるから。それで多くのことを学ぶ人はそれだけ善となり、諸々の知識と高尚な物事への愛をそれだけ有つことになる。それで人が怠らずにふさわしい時に、何かあることを学ぶことは正当なことである。無知なうえに何も学ぼうともしないで、教えを軽蔑して、幾つかの知識は全く悪いなどと言うものが何人かいるが、私としては悪い知識というものはなく、全て善であるが、悪用され得るだけであると言いたい。学識ある人は生来善良かつ敬虔であって悪を避け善を為すものなのである。諸々の知識はそのことに役立つ。それらが善悪を認識させるからである。幾人かの人にはあらゆる種類の知識を学ぶことができるが、それは誰にでも許されているわけではない。かといって完全に無知蒙昧な人間はいない。人は何かを学ぶことができるのであって、愛こそ彼をそれへと誘うのである。このような理由から、何も学ばなくともよいという言い訳は誰にも成り立たない。今日のドイツの国をみるに、多数の大きな作品を作らなければならない幾人かの画家たちに、絵画の真正の理論が大いに欠如していることを、私は実際に認める。彼らとその作品を改善することが大いに必要なのである。彼らがそれを学んで我がものとしていたならば、良き作品をつくるよりも正しからざる作品を作ることの方が、かえって困難を伴うほどなのだ。まだ多くのことは識らないけれども、喜んで学ぼうとする人たちのために、私は以下のような教えを正確に伝えたい。だが一切を識る〔と称する〕高慢なる人々には関わりたくないが、彼らが何か真正で良きことを識っているならば、大きな感謝をこめて彼から学びたい。

それ故に志のある人は私の語りかつ為すことを見聞して、それを学びなさい。それが役立つ、より良き理論を妨げず、汝がより良き作品を作るのを怠るように仕向けないことを、私は希望する。この理論は眼前に図示される。人間の最高の感覚は視覚であるから。

それで、我が国で前にこのようなことを見聞しなかった幾人かの人たちがこれらのことを熱望することを私は知っている。それで汝らもそれを熱望するならば、それから選択して、汝の欲するように改善を求めなさい。但しその際真理から離れないという枠内でそうしなければならない。何であれ、見られる物は、聞かれるものよりも、信じられる。見聞あわされば、もっと強力に抗い難く把握される。それで一層よく理解されるために、私は本文と挿図を一緒に合わせたのである。

眼前に呈示されるあらゆる形態は、鏡のように我々の眼に映る。我々の眼の本性として、ある形態や形姿が他のそれよりも好ましく見えるのである。それでいて一方がより善いとかより悪いということはない。我々は美しいものを好んで見たがるが、それはそのことが我々に喜びを与えるからである。美を判断するには、他の人よりも理論に富む画家の言葉の方が信頼される。

正しい尺度は良き形態を与える。それは絵画だけでなく数えあげられうる全ての立体的なものについてそうである。絵画に役立つことを私が記述することは、当を得ないことではない。なぜなら絵画は教会に奉仕して、それによりキリストの受難は示されるのであり、また人の姿をその死後にも保つからである。大地、水面および星辰の測定は絵画の呈示によるのが理解され易く、絵画によって多数の人が多くのことを識るであろう。正しくしかも美しく描くための理論を習得することは、困難である。それでその素質が自分になくと思う者はそれを志向する勿れ。なぜなら[才能の]流入は上方からくるものであるから。理論は...

3

Salus 1513

以下の拙論は画学生の糧ともばれる。

それから生じる有用性のために何かを識ることは、人にとって極めて必要なことである。それ故に我々は全て喜んで学ぶべきである。我々が多くのことを知れば知るだけ、一切をよく識り給う神の御姿にそれだけ我々は似たものとなる。様々な知識がみられる。十分に役立ち得るものを〔それから〕1つとりあげて、それを学び、それを習得して汝の喜びとなすまで、その苦勞を厭ってはならない。我々には多くのことを識りたがる傾向が有り、それに飽きるということを知らない。一切の正しい真理を認識するために、全てのことを識りたがる傾向が、生来我々に植えこまれている。だが我々の脆弱な精神は一切の知識、真理および知恵のこのような完全性に達することはできない。かといって我々は全ての知識から全く締め出されているわけではない。学習によって理性を研ぎすましてそれに励むならば、我々は正しい方法と手段によって幾つかの真理を探求し、学び、認識し、獲得してそれに達することが十分にできるのである。それで暇なときに自己に最もふさわしいと感じられるものを学び、神を崇敬して自己自身や他人の役に立てようと心がける人は、善を為すのである。彼らのなかの多くの人が様々な知識を探り出して、今日我々に役立つ真理を示したことは知られている。それで人が他人に教えることは正しいことである。喜んでそれを為す人に神は多くのものを与え給う。そして神より一切を我々は得ている... [欠字アリ]神は最高に賞賛される。学識は人を不遜にするという理由で幾人かの無教養な人たちがそれに反対するとしても、人が多くのことを学ぶことは悪いことではない。もしそうだとすれば、全ての知識を具え給う神ほど高慢なものはないことになろう。それはあり得ないことである。神は最高善であるから。それで多くのことを学ぶ人はそれだけ善となり、諸々の知識と全ての高尚な物事への愛をそれだけ有つことになる。それで人が怠らずにふさわしい時に、何かを学ぶことは正当なことである。

無知なうえに何も学ぼうとしないで、教えを軽蔑して、多くの悪は諸々の知識から生じ、ある種

のそれは全く悪いなどと言う者が幾人かいるが、それに対する私の意見はこうである。つまり、私は悪い知識というものはなく、知識は全て善であるとみる。1本の剣は殺害にも裁きにも使用される剣である。それ故に諸々の知識自体は善である。神が定めたものは、それらの多くのものが悪用されるにしても、善なのである。学識に富む人は敬虔で生来善良であるので、悪を避け善を為すのである。諸々の知識はそのことに役立つ。それらが善悪を認識させるからである。幾人かの人はあらゆる種類の知識を学ぶことができるが、それは誰にでも許されているわけではない。かといって完全に無知蒙昧な人間はいない。人は何かを学ぶことができるのであって、愛こそ彼をそれへと誘うのである。このような理由から、何も学ばなくともよいという言い訳は、誰にも成り立たない。今日のドイツの国をみるに、多くの画家たちには学習が必要であることを、実際私は認める。彼らは真正の理論を有たず、しかも多数の大きな作品を作らなければならない。彼らの数は多数にのぼるけれども、作品を改善することが彼らに極めて必要であろう。無知なままで仕事をする人の方が理性的に仕事をする人よりも仕事が困難である。それ故全てのことを学び、正しく理解しなさい。まだ多くのことを識らないけれども、喜んで学ぼうとする人たちのために、私は以下のような教えを喜んで伝えたい。だが自分たちは一切を知りまた最善の者たちであると自負して、他の事柄を全て軽蔑する傲慢な人たちのことを、私は気にしたくない。しかしそれを手〔作品〕で示す真正の芸術家たちから教えをうけることを、謙虚にまた大いなる感謝をこめて私は熱望する。それ故に志のある人は私の語りかつ為すことを見聞して、それを学びなさい。それが役立ち、より良き理論を妨げず、汝がより良き作品を作るのを怠るよう仕向けないことを、私は希望する。画家のこの理論は眼前に図示される。人間の最高の高貴な感覚は視覚であるから。それで、我が国で前にこのようなことを見聞しなかった幾人かの人たちがこれらのことを熱望することを、私は知っている。それ

でこれを熱望する人は、それから選択して、汝の欲するように改善を求めなさい。但しその際真理から離れないという枠内でそうしなければならない。何にてあれ、見られる物は、聞かれるものよりも信じられる。見聞あわさればもっと強力に抗い難く把握される。それで一層よく理解されるために、私は本文と挿図を一緒に合わせたのである。

眼前に呈示されるあらゆる形態は、鏡のように我々の眼に映る。我々の眼の本性として、ある形態や形姿が他のそれよりも好ましく見えるものである。それでいて一方がより善いかとかより悪いということはない。我々は美しいものを好んで見たがるが、それはそのことが我々に喜びを与えるからである。美を判断するには、他の人よりも理論に富む画家の方が信頼される。

正しい尺度は良き形態を与える。それは絵画だけでなく数えあげられうる全ての立体的なものについてそうである。

絵画に役立つことを私が記述することは、当を得ないことではない。なぜなら絵画は教会に奉仕して、それによりキリストの受難と他の多くの良き似姿は示されるのであり、また人の姿をその死後にも保つからである。大地、水面および星辰の測定は、絵画の呈示によるのが理解され易く、また絵画の呈示によって多数の人が多くのことを識るであろう。

正しく、精巧にして技巧みに、しかも美しくて

好もしく描くための理論を習得することは、困難であり、[そのためには]長い[訓練の]時と熟達した極めて自由な手を必要とする。それでその素質が自分がないと思う者は、それを志向する勿れ。なぜなら[才能の]流入は上方からくるものであるから。理論は...

4

教への効用について

そのこと[古代の美術理論書の喪失]に鑑みて、何かを識っている人が、それを必要とする他の人に教えることは、どうしても必要となる。我が国では絵画の需要が極めて多く、画家の数も多数にのぼり、しかも彼らは夥しい数の作品を作らねばならないのに、[彼らには]真正な理論が大いに欠けており、そのために我々全ては僅かな教へをも必要とするほどであることをみて、私はこのようなこと[美術理論書を書くこと]を企画した。彼らの多くは無知なままに仕事をして苦勞と時を空費する。だが前以て自己の作るべきものを正しく理解すれば、仕事はそれだけ容易になる。

(Nr. 8, 10, 11, 12, は今回は省略する。)

(本稿は、昭和63年度科学研究費補助金一般研究C「アルブレヒト・デューラーの芸術論と作品の関連についての研究」(研究代表者は筆者)による研究成果の1部をなすものである。)